しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことがありません。
わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。

高松泉キリスト教会　ニュースレター

第 162 号（2023 年 7,8 月合併号）

いずみ

香川県高松市伏石町 2018-5
Tel & Fax 087-867-2302
http://izumichurch.holy.jp/
発行人　宮地　宏一

先日 依頼されたプロフィールに“特技”を書く欄がありました。これを聞かれるのが一番苦手。悩んだ末に「値切ること」と書きました。お店の人と交渉し、少しでも安く買うことができると達成感を味わえるからです。二月、父に会うために従姉妹たちが訪ねてくれたので、奮発してホールケーキを二つ買いました。いつもの癖で「二つ買うから、少し安くなりません？」と尋ねると「良いわよ～200 円まけとくわね」 このやり取りを見ていた従姉妹は「ケーキ屋さんで、値引く人 初めて見た」と完全に引いていました。それ以来、値切る店を考えなければと思いますが、ついつい、、、

今月も皆様とご家庭の上に、神さまからの恵みが豊かに注がれますように。　(2023.07.01)

しっかり悲しむ

父が先月、81 歳で召されました。ちょうど 1 年前に、膀胱癌を告知されたとき、私はそれほど深刻だとは思っていませんでした。けれど治療を受けても改善せず、膀胱を取り除かなければならなくなったのです。父は随分、悩みました。もう痛くて辛い手術を受けたくなかったからです。でも最終的に膀胱癌を克服して、生きるという選択をしました。3 月中旬に手術を受け、二日後に脳梗塞となり、それからしばらくして腎不全による透析開始、肺炎や感染症などを併発し、6 月 13 日に召されました。

私は病院から父が危ないと電話があるまで、父が死ぬなんて思ってもみなかったのです。いや、死というものが本当の意味で分かっていませんでした。愛する家族を失うことが、これほど辛く、悲しく、しんどいとは。。。父には、もっと生きていて欲しかった。死という人間の力では、どうすることもできない現実を前にして、虚無感に襲われました。

そんな中でも、やるべきことがたくさんあったのです。親族・友人に、父の死を報告すること。その度に涙があふれました。また葬儀の準備をしながら、ふと寂しさがこみ上げ、父のもとに行き「どうして、死んじゃったの？」と涙声で語りかけたのです。

葬儀の司式は、私がしました。妻は私が泣きすぎて、葬儀にならないのではないかと心配していたそうです。確かに、たくさん泣きましたが、葬儀が中断することはありませんでした。葬儀の中で、参列してくださったすべての親族・父の友人たちに、父との思い出を語っていただきました。語るも涙、聞くも涙でしたが、父に愛され、父を愛し、父の死をともに悲しんでくださる方々の存在は、私にとって大きな慰めとなったのです。

父の死から 3 週間近く経ちましたが、悲しみや喪失感から立ち直ることができていません。まだまだ多くの時間が必要だと感じているのです。こうして文章を書きながらも、涙がこみ上げてきます。「もっとこうしてあげたら良かった」と後悔し、自分を責めてしまうこともあるのです。

1 年半ぐらい前、記者の河合真美江さんがご主人、お父様を亡くされた心境を記事にしておられました。喪失感の中にあった彼女に光を与えてくれたのが、長田弘さんの「詩ふたつ」（クレヨンハウス）でした。それを伝えるため、クレヨンハウスの主宰者・作家の落合恵子さんを訪ねるのです。

詩画集（「詩ふたつ」）を出したころ、落合さんも長く介護した母親を亡くした喪失感の中にいた。向き合って生きてきた母がいない。何をしても何を見ても、うちのめされた。今も母を思って夜中に泣き出してしまう。新しい介護の本を読めば、今ならもっと深い介護ができるから一ヶ月でも帰ってきてほしいと願ってしまう。

「悲しくないはずがない。悲しみは愛した証しです。愛した人が今も自分の中にいるって、誇らしいことですよね」

泣きたいときは泣くに限る。「おとなになると泣くのは恥ずかしいことのように思うけれど」と、落合さんが絵本をプレゼントしてくれた。あ、シールがはってある。「悲しいとき泣いていいだよ！」って。

絵本は昨年出た「悲しみのゴリラ」。ママを亡くした男の子にゴリラが寄り添う話だ。

どうしてママが死んだの？ゴリラが答え、話すうち、男の子はパパと一緒にママが残してくれたものに気づく。

亡き人を思い、どう生きていくか。生活面で「喪の旅」を取材してきて一年。400 通ほどのお便りをいただき、何十人ものかたの思いをうかがった。

どうして死んでしまったの？男の子と同じ問いを多くの人が抱えていた。その答えられない問いも、いっぱいの思い出も、これからの時間も、喪失感でさえもみんな死者が残した贈り物なのかもしれない。

【朝日新聞 2021.12.25「多事奏論」より】

悲しみ・後悔・喪失感・涙。これらは愛する人の死を受けとめる過程では、とても大切。

悲しみをごまかしたり、泣くのを我慢したりする必要はなく、しっかり悲しみ、しっかり泣く。私も父が召されてから、涙の皮袋が空っぽになるほど、泣きました。「どうして？」と何度も神様に訴えたのです。このように自分の素直な感情を隠さず、おもてに現わすことで、少しずつ心が癒やされていくのを感じました。また悲しみ・痛みを受けとめてくださる方々の存在は、どれほど大きかったことか。

それとともに葬儀を通して改めて確信したことは、肉体の死は私たちにとって絶望ではないということです。死がすべての終わりだったら、私たちの人生は空しく、死に向き合うことは難しいでしょう。しかしイエス様を信じる者たちにとって、死は終わりではありません。なぜならイエス様が私たちの人生の最大の敵である死を打ち破り、よみがえられたからです。私たちは後々、新しいからだが与えられ、よみがえる望みが与えられています。そして先に召された人たちと再会し、死もなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない新しい世で、ずっと神様のそばで生きることができるのです。

父は長年、イエス様を信じることから逃げ続けましたが、1996 年 12 月にイエス様を信じて、洗礼を受けました。その後、父が書いた文章には、感謝ということばがあふれていたのです。“洗礼を受けて感謝”“礼拝に休まず出席できて感謝”“主の豊かな恵みを受けて歩んでいる日々に感謝” この感謝の心は、父の内から最期まで消えることはなかったでしょう。

私もこの世にある限り、いつも主に感謝し、私たちの苦しみに寄り添ってくださるイエス様とともに歩んでいきたいと願っています。

神は彼らの目から涙を
ことごとくぬぐい取ってくださる。

- ○ 礼　　拝　　毎週日曜日 10：30～12：00
- ○ 祈 祷 会　　毎週金曜日 10：30～12：00
- ○ イズミン・キッズ　毎週日曜日 9：30～10：20
- ○ おやこ de えほん　毎週水曜日 10：30～13：30
- ○ Friendly English　毎週火曜日 16：00～18：10（小学生向け）
  毎週木曜日 9：30～11：50（大人向け）